

## 謝靈運の「玄風」の語について

鵜飼光昌

山水詩の開拓者として中国文学史上著名な謝靈運（三八五—四三三）は若年のころより仏教に関心を示し、当時江南仏教界の巨匠として声望の高かった廬山の慧遠の徳風を聞くや、はるかに思慕の念を抱いていたが、義熙八年頃、廬山において慧遠に初めて相見ゆるに及んで、その尊崇の念は決定的なものとなる。

『高僧伝』慧遠伝に、「陳郡謝靈運、才を貪み、俗に倣り、推崇する所少なし。一たび相見ゆるに及んで、肅然として心服す」と記されるように、慧遠に会うことによって謝靈運が得た精神的な衝撃はかなりのものであったらしい。恐らく四海の民ごとごとくから思慕される老慧遠の温和な風貌の中に、仏法弘通のために時の最高権力者桓玄に対しても敢然と論争を挑みさえする強靱な精神に裏打ちされた凜とした威風を、謝靈運は直感的に感悟したのであろう。これ以後、謝靈運は慧遠に深く帰依するようになる。後に慧遠の依頼によって書かれた『仏影銘』を見ると、法身とその応現に対する理解や観仏三昧の觀念等、慧遠の強い思想的影響が見られ（拙稿「謝靈運の『仏影銘』について——その仏教思想と山水表現の萌芽——」、「文芸論叢」31号、一九八八年）、さらに慧遠が没するにおよんで謝靈運が撰した『廬山慧遠法師誄』には志学の年に門人の末流に連ならんことを願いながらも、宿縁の輕微であったためにそれがかなわなかったことを嘆きつつ、師慧遠を失った哀惜の情が切々と述べられる。今、その「序」の部

分を以下に引こう。

道は致を<sup>なを</sup>一にするに存す。故に代を異にするも輝きを同じうす。徳は理の妙なるに合ふ。故に方を殊にするも致を齊しうす。釈（道安）公、玄風を関右に振るひ、法師（慧遠）、沫流を江左に嗣ぐ。風を聞きて悦び、四海、同に帰す。爾して乃ち、仁を山林に懷き、隱居して志を求む。是に於て、衆僧、雲集し、淨行を勤修し、法を同じうして風を養き、道門に栖遲ふ。五百の季に、仰いで舍衛の風を勸ぎ、廬山の嶠に、俯して靈鷲の音を伝ふと謂ふ可し。洋洋乎たること未だ曾つて聞かざるなり。予、志学の年に、門人の末たらんことを希ふも、惜しいかな、誠願遂げられず、永く此の世に違る。春秋八十有四、義熙十三年秋八月六日、薨す。年は縦心を踰へ、功は遂げらるるも、身は亡ぶ。始め有りて斯に終るも、千載に光を垂れん。嗚呼、悲しいかな。

（大正 52・267・b）

この「序」に続いて本文の「誄」に入るのであるが（紙教の關係で省略）、序と誄全体を見わたすと、慧遠が道安に学を承けたこと、廬山に東林寺を建てて弟子の育成に努めたこと、鳩摩羅什と書信を往復して仏学上の討論を行ったこと、さらには禪觀・三昧の実践等、謝靈運が慧遠の生涯を熟知していたことが窺われる。その一について詳論する暇を持たないが、文中の「釈（道安）公、玄風を関右に振るふ」の一文は謝靈運の仏教に対する態度を窺わせるものとして私には興味深い。

例えば『辞源』修訂本（一九七九年商務印書館）に拠れば、「振」にはその⑤に「消除……振、棄也」（二五九頁）とあり、同じく「玄風」の項を見ると「談玄的風氣、指論道家義理之言」（二

〇(二一頁)とある。サンسكريットの原語に中国固有の老荘の用語を当てはめ、仏教教理の説明と解釈を便ならしめるという所謂「格義」——老荘風の仏教解釈法——を道安が排斥したと伝えられていることにより、筆者も最初は『辞源』に従って、「振」を「棄也」と取り、「玄風」を「道家の義理の学」と取って、先きの一文を「道安公は関右の地において、(仏典解釈上)道家の義理の学(を使用すること)をお棄てになられた」の意に解していた。六朝期、『易』『老子』『莊子』の学を「三玄之学」——玄学——と呼び慣らわしていたことから、謝靈運の「玄風」の語も「幽玄なる道家の学」を指すと信じて疑わなかったのであるが、どうやらそうではないらしい。試みに「玄風」の用例をいくつか集めてみると次のようになる。

- (1) 於是振錫取足者、仰玄風而高蹈。禅思入微者、挹清流而洗心。(慧遠「三法度序」) (2) 有晋中興。玄風独振、為学窮於柱下、博物止乎七篇。(沈約「宋書」謝靈運伝論) (3) 求仁既自我、玄風豈外慕。(江淹「雜体詩」三十首「殷東陽興嗣」、『文選』卷31) (4) 莊周著内外数十篇……、秀乃為之隱解、發明奇趣、振起玄風、読之者超然心悟、莫不自足一時也。(房玄齡「晋書」向秀伝) (5) 玄風転飛蓋、紫氣汎仙車。(張君房「雲笈七籤」卷99)

このうち(2)(3)(4)は老荘、(5)は道教を指し、時代が降るに従って意味が固定していくかのようにであるが、(1)の慧遠の「三法度序」の用例は前後の文章から類推すると「玄風」の語がここでは仏教を意味していることが明らかとなる。とすれば慧遠と同時代の謝靈運の『誄』における「玄風」の語も仏教を意味する可能性を持つことになる。一方、「振」の字については、(4)の『晋書』向

秀伝の「振起玄風」の表現を傍証にして考えてみると、ここでは「振」の下に「起」とあることにより、「振」は先きに私が示した『辞源』の㊦の「棄也」の意味を持つものではなく、同辞典の解釈例の最初に掲げられた㊧の「挙起」という積極的な方向に解する必要があることを示すものであろう。つまり(1)の慧遠の「三法度序」の「玄風」の用例と、(4)の『晋書』の「振起玄風」の用例を勘案すれば、謝靈運の『誄』の「(釈)安公振玄風於関右」の一文は、「釈道安公は関右の地に幽玄な教風(である仏教)を宣揚された」と解さねばならない。このことは謝靈運にせよ慧遠にせよ仏教を信奉しつつも、老荘思想にも極めて造詣の深かった東晋期の知識人にとって、老荘色の濃厚な「玄」という文字によって仏教を表現することに何ら抵抗がなかったことを示すものであろう。この一文の解釈は些細な例にしかすぎないけれども、例えば衣川賢次氏が推測されるように、謝靈運の「登永嘉緑嶂山」詩の一節、「恬と知はすでに交わり、繕性は此より出す」においては、明らかに「莊子」に基づく「恬知」の言葉が禅観を意味し、「謝靈運山水詩考」、『日本中国学会報』36集、一九八四年、さらに筆者がかつて仮説を提出したごとく、やはり「莊子」に基づく「得意(忘言)」の語が、『弁宗論』においては竺道生の頓悟の思想を指す(拙稿「謝靈運の『弁宗論』における『道家之唱、得意之説』の解釈をめぐって」、『佛教大学大学院研究紀要』15号、一九八七年)とする解釈を側面から擁護しよう。「玄風」が仏教を、「恬知」が禅観を、「得意」が頓悟を意味するとなれば、それは老荘と仏教の融合という時代の思潮の中で、謝靈運自身の思想形成の過程においても両者は対立・背反するものとして意識されなかったことを示唆する証左となるものであろう。